

周辺環境



高館山



カタクリ



キビタキ

●高館山

標高274mの低山ながら江戸幕府の直轄領として森林の伐採が禁じられていたため、ブナ林やケヤキの巨木が多く残っています。春にはカタクリやキクザキイチゲなどの早春の植物、初夏には夏鳥であるキビタキやオオルリなど貴重な動植物を見ることができます。年間を通して、散策や野鳥観察の場として人気が高く、市内だけでなく県内外からも多くの方が訪れます。



都沢湿地



オオヨシキリ



アメリカザリガニ

●都沢湿地

下池に隣接するこの場所はもとは田んぼでした。休耕田後は、下池から浸みでる水によって貴重な湿地生態系を作りだし、夏はオオヨシキリやトンボ類をはじめとする多くの湿生動植物を見ることができます。しかし、このまま放っておくと、①自然遷移による陸地化や②外来動植物の増殖といった課題が都沢湿地の再生の妨げになっており、現在、市民と一緒にこれらの課題解決のためにいろいろ取り組みを行っています。

周辺施設

おうら愛鳥館



下池の堤防にある「おうら愛鳥館」では、夏はカイツブリやカルガモ、秋から冬にはコハクチョウやガン・カモ類などの多くの渡り鳥を池のすぐそばで観察することができます。また、館内にはその季節に見ることができる動植物の写真が飾られており、一年中利用することができます。

鶴岡市自然学習交流館「ほとりあ」



庄内自然博物館構想の学習交流拠点として2012年に開館しました。年間を通じて、自然環境にかかわる学習会や観察会を開催しています。また、水網やバケツ、双眼鏡の貸し出しを実施し、来館者が周辺の自然環境と触れ合う機会を提供しています。



施設情報

〒997-1125 山形県鶴岡市馬町字駒繫3-1 TEL:0235-33-8693 FAX:0235-33-8694 Email:info@hotoria-tsuruoka.jp
 URL: <http://www.hotoria-tsuruoka.jp/> 開館時間:午前9時~午後4時30分 休館日:毎週火曜日、年末年始(12月29日~1月3日)
 入館料:無料 駐車場:普通車20台、身障者用2台
 ※火曜日が祝日にあたる場合「その日においてその日に最も近い平日(休日以外の日)」が休館日になります。

庄内自然博物館構想推進協議会/事務局 鶴岡市環境課 TEL 0235-25-2111

写真提供:伊藤佳典、大井健也、太田威、佐藤昭次、升川繁敏、水口亮、和田亮、大山自治会、鶴岡市、鶴岡市自然学習交流館、フレームワークス写真事務所

本パンフレットは、2018年度公益信託庄内銀行ふるさと創造基金の助成を受けて製作しています。

ラムサール条約登録湿地 大山上池・下池

~里池とわたしたちの歩み。そして、これから~

庄内自然博物館構想

本構想は「高館山、大山上池・下池、都沢湿地を自然学習のフィールドとして、子どもたちをはじめ市民みんなが自然との一体感を享受できるように、自然と触れ合う機会を創出しよう」という、多くの人の願いが込められています。

2018年10月

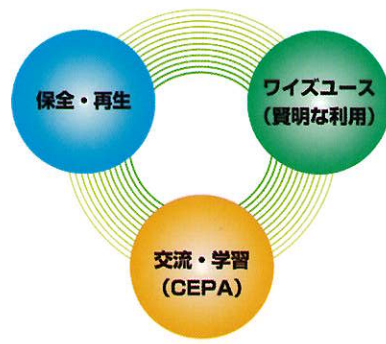
1. ラムサール条約とは？

(1) ラムサール条約

ラムサール条約とは、湿地の保全と賢明な利用を目的とした国際条約です。正式名称は「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」といい、1971年にイランのラムサールにて条約が締結されたことからこの名前で呼ばれています。環境に関係する国際的な条約としてはもっとも古い条約です。

(2) ラムサール条約を支える3つの柱

湿地の「保全・再生」、「ワイズユース(賢明な利用)」、これらを促進する「交流・学習(CEPA)」が、これが条約の基盤となる3つの考え方であり、お互いに支え合っています。中でも、「ワイズユース」は、地域の人々の生業や生活とバランスのとれた保全を進めることが、湿地の生態系を維持し、湿地の恵みを持続的に活用することに繋がるという条約の特徴的な考え方です。



ラムサール条約の3つの柱

(3) 日本のラムサール条約登録湿地

日本は、1980年に釧路湿原が初めて登録されて以来、順次条約湿地を増やしています。そのすべての登録地が、国際的選定基準のいずれかに該当しています。大山上池・下池は多くの関係者の協力のお陰で、「定期的に2万羽以上の水鳥を支える湿地」という国際的選定基準を満たし、2008年10月に山形県唯一の条約湿地に登録されました。

2008年の登録時は37か所であった国内登録数は、2018年10月現在で52か所に増え、登録された意義や地域資源としての活用について改めて考える時期を迎えています。

2. 大山上池・下池とコハクチョウ

～コハクチョウはいつから越冬するようになった？～

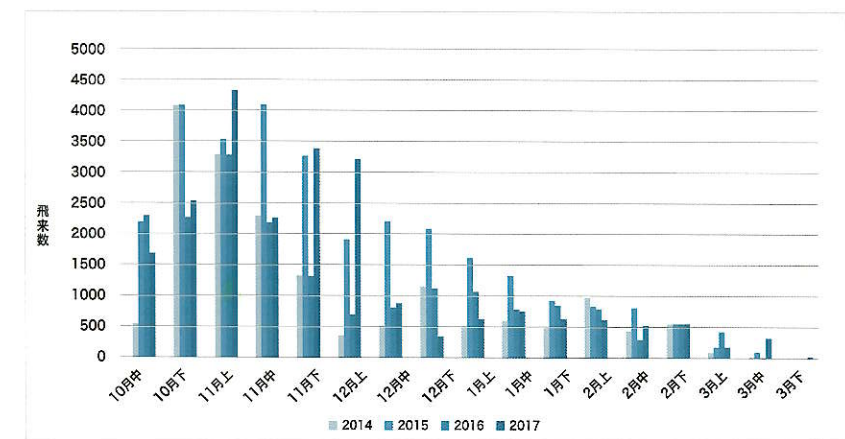
今でこそ、両池は渡り鳥の越冬地として有名ですが、昔から越冬地として利用されていたわけではありません。昔は、冬になると採餌場である庄内平野は雪で覆われ、両池も結氷するため渡り鳥が越冬するには厳しい環境でした。多くの渡り鳥が越冬するようになったのは、地球温暖化の問題が心配され始めた1980年代後半のことです。コハクチョウの飛来は1988年からだといわれています。その後、毎年その数を増やし、コハクチョウやマガモをはじめとする多くの渡り鳥が越冬する「水鳥の楽園」と呼ばれるようになりました。冬の使者といわれるコハクチョウですが、もっとも多くみられるのは稲刈り直後の10～11月です。その後、池が凍るようになると南に下り、2月下旬～3月になると本格的な北帰行がはじまります。



庄内平野で採餌するコハクチョウの群れ



池全体が結氷した下池



2014～2017年度 大山上池・下池のコハクチョウの飛来数

*大山上池・下池のコハクチョウの情報は、東北地方環境事務所野生生物課より情報提供いただいています。

3. 大山上池・下池でみられる野鳥

大山上池・下池、高館山、都沢湿地では年間を通じて、多くの野鳥を見ることができます。その数、約200種にも及びます。冬の渡り鳥であるガンカモ類は約25種が確認されています。

冬鳥(ガンカモ類)



コハクチョウ

庄内の冬の使者。ハクチョウにはオオハクチョウとコハクチョウがいるが、両池はコハクチョウの飛来が多い。



オオヒシクイ

両池に飛来する多くは亜種オオヒシクイ。水草のヒシの実を食べることが名前の由来。国の天然記念物。



マガン

警戒心が強く、「カハハン」という甲高い鳴き声特徴的。国の天然記念物。



マガモ

両池で一番有名なカモ。両池はマガモの全国有数の越冬地。別名「アオクビ」。



コガモ

秋の早い時期に日本に渡ってくるカモ類の中で一番小さい。大きさはハト位。



オナガガモ

名前のとおり長い尾が特徴。近年、飛来数が増えているカモ。



ホシハジロ

雄は赤茶色の頭に、赤い目が特徴。雌雄ともにくちばしの一部は白い。



ハシビロガモ

へら状のくちばし特徴。上下のくちばしは櫛状になっており、水中のプランクトンを濾して食べる。



ヒドリガモ

雄の頭部は赤茶色で額部分がクリーム色。名前の「緋(ひ)」は赤という意味。「ビューィ」と甲高い声で鳴く。



キンクロハジロ

長い冠羽がかわいらしい潜水カモ。金色の目、黒い体、白い翼帯その見た目が名前の由来。



ミコアイサ

その愛くるしさから人気のある潜水カモ。白と黒の模様から別名「バンダガモ」と呼ばれる。



ヨシガモ

雄はその頭の形から「ナポレオンハット」の異名を持つ。鎌形の尾羽は飾り羽になっている。

猛禽類



オオタカ

両池に一年中いる。冬には越冬するカモ類を狙う。



ミサゴ

両池に一年中いる。両池ではフナなどの淡水魚を捕まえる。



オオワシ

秋から冬に少数が飛来する。黄色い大きなくちばしが特徴。



オジロワシ

秋から冬に少数が飛来する。白い尾がかくさび形なのが特徴。

留鳥



カイツブリ

小型のカイツブリ。毎年、両池で繁殖。ヒナが親鳥の背中に乗る姿は愛らしい。



カンムリカイツブリ

大型のカイツブリ。本来は冬鳥だが、2016年夏に下池で繁殖。山形県内で初記録。



カワセミ

コバルト色の羽の色から別名「飛ぶ宝石」。両池でも水中の魚を狙っている姿を見ることが出来る。



アオサギ

日本最大のサギ。両池や都沢湿地で多く見られ、飛翔する際には「クアッ」と特徴的な声を出す。

4. 大山上池・下池



大山上池・下池は、山形県鶴岡市の西部に位置する高館山山塊にある大小2つの淡水の農業用ため池です。桜の名所である大山公園を挟み、下池は山塊の主峰高館山(標高274m)の南東側に、上池は高館山の南に連なる八森山(標高229m)の南東側に位置します。両池は、それぞれ地元の土地改良区が管理し、生活排水の流入はなく、水源は山塊からの沢水や湧水、雨水によって涵養されています。また、池の周辺には住宅地や水田地帯が迫り、下池の東側には約7.7haの都沢湿地が広がっています。

— コラム —

市民による「おうら愛鳥館」のリニューアル!

下池の堤防にある野鳥観察小屋は、2001年10月に山形県の事業として建設されました。市内の小中学生に愛称を募集した結果、「おうら愛鳥館」という名前が選ばれ、散策の休憩所や冬の渡り鳥の観察場所としてたくさんの方に利用されてきました。

しかし、建設から約20年が経ち、老朽化が目立つようになりました。そこで2018年、大山上池・下池がラムサール条約登録10周年を迎える機会に市民の皆さんと外壁のペンキ塗りと入り口に飾る絵を製作し、「おうら愛鳥館」をリニューアルしました。これからもたくさんの方から利用される観察小屋であってほしいです。



リニューアルされた「おうら愛鳥館」



愛鳥館に飾る看板の色塗りワークショップ



サポーターさんと愛鳥館のペンキ塗り作業

大山上池



【基本情報】

面積 …………… 15.0ha	集水面積 …………… 52.0ha
堤防の長さ………… 323.2m	貯水量 …………… 258,000m ³
堤防の高さ………… 4.3m	かんがい面積………… 56.1ha
洪水吐 …………… 1か所	水深 …………… 2.6m
取水施設 …………… 1か所	管理 …………… 庄内赤川土地改良区



上空から見た上池



1930~1940年頃の上池での漁



8月、上池全体にハスの花が咲く

大山下池



【基本情報】

面積 …………… 24.0ha	集水面積 …………… 105.0ha
堤防の長さ………… 432.0m	貯水量 …………… 793,500m ³
堤防の高さ………… 5.0m	かんがい面積………… 189.4ha
洪水吐 …………… 2か所	水深 …………… 3.94m
取水施設 …………… 2か所	管理 …………… 西郷土地改良区



上空から見た下池



1960年頃の下池でのボート遊び



11月、紅葉した高館山と下池

5. 時代とともに変わる池と人のかかわり

(1) 大山上池・下池はいつできたの？

大山上池・下池は、庄内最古の正保庄内絵図(1644年)に池の姿が描かれていることから、それ以前に治山治水の水害対策と農業用水の貯水池として築造されたと考えられています。時代や地域によって池の名前も変化しており、上池であれば「上ノ堤、上堤、上溜井堤、上湖」、下池であれば「下ノ堤、下堤、深湖堤」と呼ばれていました。



○枠内が正保庄内絵図に描かれている両池(致道博物館蔵)

(2) 江戸時代から続く「浮草組合」

1856年以前から続く「浮草組合」は両池を活用する代表的な組織です。組合では両池の浮草を採取する権利を持ち、現在も8月のお盆にはハスの花や巻葉、たんぼ(果托)の収穫販売、9月中旬にはハスの根茎(レンコン)の収穫を行っています。1933年の資料によると、組合ではハス以外にもオニビシやヒシを薬用や食用に、マコモ(がじぎ)は堆肥、フトイ(おひ)は草履などの藁細工、またジュンサイは料理用に収穫していたと記されており、多くの水生植物を活用していました。



ハスの花や葉の収穫



上池一面のハスと浮草組合の舟



ハスの花や葉、果托を盆花として販売

(3) 昔は生活の一部だった両池

「浮草組合」以外にも昔は、漁業(養魚)組合や海老組合、牧野組合などが存在し、多くの人々が両池を含む周辺環境を活用していました。また、数年に一度は「土砂吐き(堀浚い)」を行い、池の水を抜き、水を入れ替えることで水質の維持も行っていました。その時には、大勢の人がコイやフナなどの魚を捕まえ、食料として池の恵みを楽しんでいました。また、その光景が大勢の人たちが提体で見ていたそうです。きっと、一大イベントだったのでしょう。



1985年、下池の土砂吐きと魚とり

(4) 変化する池と人のかかわりと現在の課題

水抜きの効果もあってか1960~1970年代頃の水質は、ジュンサイの生育に適した弱酸性で貧栄養の状態すなわち一般的に「きれい」といわれる状態でした。その証拠に、当時は夏になると地元の子供たちは池で泳ぎ、ほとりには貸舟屋もあり観光地としても賑わっていました。また、下池には料理店があり、店ではコイやフナ、外来生物であるウシガエルの料理を食べることができました。このように、当時は人が池を活用することで自然環境が維持されていました。

しかし、1990~2000年代頃になると池の水質の富栄養化が問題になります。その原因の1つとして、専門家からは渡り鳥が排泄する糞尿が指摘されました。この頃になると、下池の料理店や貸舟屋は閉まり、水生植物は食用などとして活用されなくなりました。さらに、池には当時ブームだったルアー釣りの影響でオオクチバスが放流され、ウシガエル、アメリカザリガニとともに増え、外来生物が生態系に影響を与えるようになりました。そして現在、池ではジュンサイも、泳ぐ子どもの姿も見ることができません。



地域のお祭りで食べたフナの雀焼き



池でのフナ釣り



コイやウシガエルを食べさせる池近くの料亭

(5) これからの池と人のかかわり

このように両池と人のかかわりは1990~2000年代を境に希薄になってきました。かかわりの希薄化は湿地環境の経済的、文化的、レクリエーション的な価値に加え、生態系的価値さえも変えてしまいました。現に両池でも、越冬する多くの渡り鳥の糞尿や水生植物の利用減少による枯死体の蓄積が池の富栄養化を招き問題になっています。また、湿地の恵みと喜ばれていた動植物は活用されなくなり、湿地の生態系を変化させました。

現在の私たちに、昔と同じような池とのかかわり方を持つことはできません。しかし、現在の課題を池と人がかかわる新しい糸口と捉え、新しい池の魅力を発見することならできるとも思えません。



湿地の植物を活用した草木染め体験
(地元小学校の総合学習)



ハスの葉を活用した象鼻杯体験



こどもラムサールワークショップでのハスの収穫体験